

第3期「確かな学力育成プラン」検討委員会 議事録（第2回検討委員会）

◆日 時 令和4年6月14日（火）午後2時から

◆場 所 上杉分庁舎 12階 第1会議室

◆出席委員

| 氏 名 | 現 職 等 | 備 考 |
|-------|------------------------|---------|
| 児玉 忠 | 宮城教育大学 教授 | 委員長 |
| 稲垣 忠 | 東北学院大学 教授 | 副委員長 欠席 |
| 我妻 良行 | 片平丁小学校 校長 | 欠席 |
| 鹿野恵美子 | 東六番丁小学校支援地域本部 スーパーバイザー | |
| 齋藤 孝志 | 株式会社サイコー 代表取締役 | |
| 齋藤 亘弘 | 八乙女中学校 校長 | |
| 佐々木 大 | INTILAQ 東北イノベーションセンター長 | |
| 佐藤 真奈 | 仙台市PTA協議会 副会長 | |
| 千葉 恵美 | 仙台市PTA協議会 副会長 | |

◆配付資料

資料1 各施策の検証及び概要

資料2 2022 仙台自分づくり教育「たく生き授業プラン集」

資料3 第2回検討委員会の進め方

座席表

◆会議概要

1 開 会

2 学校教育部部長挨拶

3 協 議

(1)【グループワーク】仙台市の教育に期待すること

**グループA 鹿野恵美子委員 齋藤亘弘委員 佐々木大委員 佐藤真奈委員
蓮沼秀行学びの連携推進室長**

佐々木委員：実際に確かな学力育成プランを拝見し、ものすごく充実した内容だという感想を持った。素晴らしい取り組みだと思う。ここで示された施策を均一に全て取り組むのは大変ではないか、重点的に取り組むものといった強弱のようなものはあるのか。また、関係性が分かりづらいと思う。A~Eが無理に結び付けられているのではないかと感じた。これが分かりづらいと現場に入りにくいのではないだろうか。もちろん全て必要な項目なのだと思うが、わかりやすい整理があると、現場の先生にとっても分かりやすいのではないか。行き届かないと意味をなさないと思う。

蓮沼室長：全ての学校で取り組む施策もあれば、可能な学校だけが取り組む施策もある。例えば、【教育指導手法の充実】の授業力レベルアップ研修は必要な学校の教員が参加、学力検査の結果を分析し、課題を把握した後、自分の学校の子供たちに照らしたときに参考になるものは利用していくことになる。全部の学校でやってい

くのは自分づくり教育である。学力サポートコーディネータ派遣事業や教科指導エキスパート派遣事業は要望のあった学校でのみ行っている。全ての施策を必ず行っていくというものではない。

佐々木委員：学校によってやったらやったなりに、どうやったんだ、何をやったんだと問われるのではないか。実施はどちらでもいいということであれば、無理にやらなくてもよいという意識にはならないだろうか。

蓮沼室長：何を行ったかは報告してもらい、情報として吸い上げる必要がある。ただ、それは学校の査定をする意識ではない。

佐々木委員：時間的にも制約があり、全てをやりきれないのであれば、おざなりになってしまい、残念な感じがする。より重点的にやっていこうというようなバランスというものはあるのか。

蓮沼室長：一般の先生方はおそらく全てを理解してはいないだろうと思う。年度末と年度初めに校長・教頭には説明している。また、担当の教員が自分づくり・学力向上・地域連携などそれぞれの事業について学んでいる。しかし、それは担当者レベルの理解になっている可能性がある。

佐々木委員：どこの学校がどういう活動をやっているかというものは共有されるといいと思う。

齋藤（亘）委員：現行の確かな学力育成プランは2018でスタートして仙台市教育構想は2021、カテゴリー分けとしてずれは生じているだろう。今回のプランですこしすっきりしてくるかなと思う。

佐々木委員：すっきりシンプルに分かりやすくなれば、広まっていく。

鹿野委員：先生方がこんなにたくさんのことを行っていることに驚いた。この多さだと先生方の人数が足りないのではないかと心配になる。現場にいても支援員や補助員が対応していて、私もその立場で入っているが、この施策についてどれだけ共有されているのかと思う。昨日、たまたま教室からから抜け出してしまう子供に対して支援会議を5人で持った。こういう場は初めてで、いろんな意見が寄せられた。これからコミュニティ・スクールも進められていくが、常日頃からそういった意見が反映されたらいいと思う。小学校でも学級担任制から教科担任制へと変わっていき、先生方の時間があいているときに自分の教室を回って様子を見ればいいと思う。教室に入れない子どもが教室に戻れる手伝いができるかもしれないと考える。たく生きプランは、すごくいい、やっているところをぜひ見てみたい。朝や帰りの会でも活用できるので参考になるいいプランだと思う。先生方はどれくらいやっているものなのだろうか。研究授業のためのプランではなく、普段の授業で活用できればいいと思う。支援本部や小1サポーターについては、成果や評価はあるのだろうか。担任の先生は、「居ていただいてありがとう」と言うが、具体的な、こういうことが良かったとか、ここだけは共通でやるべき、みたいなもの

があれば、サポーターも支援本部も学校も楽になるのではないか。支援本部はどんどん使ってもらったら、「こんなことをしたよ」という情報共有をすべきだと思う。スーパーバイザーさんが、何も仕事来ないと悩むことがなくなるだろう。自分づくり教育の取組では、25歳になった時に、小・中学校を振り返って、「あれがよかった」とかという意見を生かされる場があるといいのではないか。

蓮沼室長 : 二十歳の座談会というものをやっている。自分づくり全体というよりは、職場体験について、成果とか、やって良かったことを毎年3~4人来てもらって聞いている。職場体験で感じたことが仕事に生きていたり、チームで協力することの意味だったり、気付く機会になったりとか、職場体験を通じて就労につながったという話もある。

鹿野委員 : 小学校でも中学校でもゲストティーチャーを呼んで、どんな子ども時代だったかとか、失敗からどう立ち直ったのかとかを聞いた方がいい。自己肯定感とか自己有用感とかはそんな話を聞くところからくるのではないか。コロナ禍で外に出られなかったとかはあったけれど、もっと外に出て行ければいいと思う。

蓮沼室長 : 職業講話、小学校だと夢教室といった、様々な活躍をしている講師に話をしてもらおう事業がある。夢や目標に向かって頑張ること、様々なことに関心を持つてばよいとか、関心を持ったことをがんばってみるとよいとか、講師の話聞き、気持ちが変わることにつながるようだ。中学校の職業講話では、少しレベルを高くして、具体の仕事の中で失敗した話などもしてもらっている。いろいろな型で、人と関わるのがたくさんあればよい。

鹿野委員 : ペーパーだけではなく、人と関わる機会がたくさんあればよい。そこから頑張ろうかなとか、勉強しなきゃダメかなとか考えるきっかけにつながる。

佐藤委員 : いろいろなことをやっていて、親の立場から見るとどれも捨てがたいが、先生方の立場で全部これをこなすのは大変だと思う。数学ができない、国語ができないことには、数字が出るから先生方には対策をとっていただいている。一番大事なのは「たくましく生きる力」ではないだろうか。今の子は自分をアピールする力や自己肯定感、自分の自信を持っているかどうか。学力が高い=自己肯定感があるではないと思う。個々の存在を認めていただいて、個々の力を伸ばしてほしい。人を認める力。将来何になりたいかとか、必ずしもみんなが持つ必要性はないが、前を向いている子が少ない感じがする。実際に社会に出たときに、経験したことをどれだけ生かせるかが不安である。これは、先生方の存在が大きいと思う。担任に認めて頂いた、小さなことでもほめられた、これが子供の力になっていく。個々の力を伸ばすような、自信を持ってアピールしていいという土台を育ててくださると、社会の波に負けないようになれる。「たくましく生きる力育成プログラム」を進めて、まさにここに力を入れて頂きたい。

齋藤（亘）委員：個人の力もそうだが、周囲の受け入れの包容力とバランスをとれていると、子供が力を発揮できる。出る杭は打たれるという感じになってしまうと、いけない。全体的にそういう気持ちを育てていきたい。

佐藤委員：そういうのをすごく上手にやってくれる先生はいる。先生との出会いは子どもにとって大きい。先生方皆さんでかみ砕いて、どういう子供たちに育てたいのか。一番核となるところを伝えてほしい。

佐々木委員：違和感があるのが、たくましく生きる力育成プランが浮いているように感じる。たくましく生きる力は最終的なゴール。学校の勉強もたくましく生きる力につながる。たくましく生きる力プログラムだけが浮いているように感じる。これが究極のゴールなのではないか

齋藤（亘）委員：そういう意味では、数値的なものに集約していったアンバランスかもしれない。たくましく生きる部分を育成すべき。大事だろう。

**グループB 齋藤孝志委員 千葉恵美委員 佐々木賢哉教育センター所長
丸山淳学びの連携推進室主幹**

佐々木センター所長：仙台市の子供たちにとって必要な力や課題について、今の立場や経験談をふまえて自由に話していただく。

齋藤（孝）委員：私はPTA会長を4年間やっていて、その学校しか見ていないが、子どもたちはすごく優秀、真面目という感じがしている。どこの学校もそうなのだと思うが、子供たちはどこか自信がなさげ、親が求めているところとギャップがあるのではないかと感じていて、子供が自信を持って発言したり生き生きとしたりしてもらいたい仕掛けが大切なのだろうなと思っている。それは親が勝手に幸せのイメージを持って押し付けようとしているからではないだろうか。ここまでくれば幸せになれるよというギャップから生まれているのかなと感じている。学校教育は勉強を教えることも大切だが、子供たちにどうやって自信をもたせていけるのかも大事だと感じている。校外のメジャーな人を呼ぶことがあると思うが、手の届かない人の話を聞いても余計ギャップが生まれる気がする。夢を実現した人はひとつまみなのに、それをモデル像にするのはどうだろうか。それは夢だからいいのかもしれないけど、そこを教えるべきなのか、もう少し手の届きそうなところに幸せな人がたくさんいるよということを伝えるべきなのか。私は後者の気がする。小さな低学年の子がプロ野球選手になりたいというのはありかもしれないけど、一定以上の年齢の子に社会とかけ離れた人たちの声をいくら伝えたとしてもポジティブに考えられるのだろうか。むしろ逆ではないか。自信喪失というか私には無理だねという感想になってないかなと感じている。

佐々木センター所長：齋藤（孝）委員の会社の若い人たちはどのような感じか。

齋藤（孝）委員：まじめな子たちが多いし、すごく優秀なのにどこか斜めから見ているという感じがする。素直じゃないという語弊があるが、根は素直だが、そう捉えられない。壁を取り去るのにすごく時間がかかる。理想と現実のギャップに悩むことが多いようだ。就職して3年で辞める子が多いというのも同じ。その場でどう自分が対応していくかが大切で、場所を変えたり環境を変えたりしても必ず同じことが生まれてくるのに、どこかで自分は正しくて周りが間違っているからと、自分のいい場所を探そうと右往左往している。たくましさがない。

佐々木センター所長：学生時代や企業に入る前にこんなことをしておけばというのはあるか。

齋藤（孝）委員：息子が野球をやっていたが、結構昭和的にやっていた。でもある意味その不条理さがよかったと思う。理詰めで説明できないことが起きるが、それは学校教育では起きないけど、社会ではよく起きることである。あれは子どもにとっていい経験だったと思う。苦手な先輩がいたり、とっつきやすい先輩がいたり、コーチの顔色を見たり、昔はよくあったと思うが、それを小さい時にやらずに社会に出ると、そういうことが起こったとき、「それってそんなもんだよね」とならない。壊れてしまうまでそこにおいておくことはよくないが、一定レベルそういうことがないと、社会に出てから大変になると思う。ただ学校の中でそれをできるかというとなかなか難しいと思うが。

佐々木センター所長：経験は以前と比べると減った。校庭でも危ない遊具がなくなるなど。昔はケガしながら覚えた。

齋藤（孝）委員：社会がそれを許容しなくなってしまった弊害。勉強もできるし、まじめだがつまずくと弱い。

佐々木センター所長：実際に理想と現実のギャップは教員にだってあるのではないかな。思っていたのと違うとか。いろんな仕事があって。子供たちの理想などについては、学びの連携推進室でも調査していると思うが、そのあたりの傾向はどうか。

丸山主幹：全体的には変わってないと思うが、つまずくと弱いとかギャップというのがあり、失敗するのが怖いからチャレンジしない傾向も見られる。そこが弱いから何とかその力をつけさせたいと思う。

佐々木センター所長：チャレンジするには目標がいるが、目標自体どうなのか。

齋藤（孝）委員：小学校高学年や中学校でなりたい自分を明確に描いている子は少なくても当たり前だと思う。現実的には、なりたいものになっているほうが少ないというほうがメッセージとして正しいのではないかな。その中で得られる高揚感や達成感、幸せを感じられることを教えていくべきではないかな。

佐々木センター所長：しかし挫折した時、どうするかが大事。目の前にいる大人が生き生き仕事していれば違うかもしれない。

千葉委員 : 子供は5学年はなれているが上の子の時は近所に子供が多く、声をかければ集まってきていたが、年々集まらなくなった。そういうのを好まない人が増えた感じがする。正直、近所にどういった方がいるかもわからず、つながりが少ないと感じる。親自体も学んでいかななくてはいけないところも希薄になった。先輩の保護者から情報を聞きたい・伝えたいが好まれない。学校のPTA活動もその通りで、なり手がいない。アンケートをとると、「なぜやらなくてはいけないのか」「保護者だけに求めるな」「先生にももっとしてほしい」など、本来の目的が伝わらないことが多い。先生方は子供と密に接している。教室に入れずにマンツーマンで過ごして手厚くしてくれていると思う。オンライン授業も試験的に実施しているが、実際に休業になったとき活用できず、休んでも公欠扱いになるとあったので休む家庭もある。そしてついていけなく、塾に行きましようとなつて、外部に託す方が多い。塾に通っている子と通っていない子の差がつくといった状況がある。また、危ないことを排除しているので痛い思いをして学ぶ事が少なくなり、失敗したとき挫折から立ち上がれない。危険なものを大人が省いてしまっている。

齋藤(孝)委員: 保護者も大切だが、先生方のサポート役が必要である。先生方の忙しさは変わってきている。年々忙しくなっているので、PTAで先生方のサポートを常勤でつけた方がいいのではないだろうか。先生たちに手厚くしてあげないと大変。

佐々木センター所長: 先生方の表情が元気なくなつてはいけない。

齋藤(孝)委員: エアコンのない部屋で仕事なんて地獄。それが普通に通っていることに違和感を感じていた。社会と先生たちの環境にだいぶギャップがあると思う。

千葉委員 : 子どもたちに自信を持ってほしい。好きな教科を聞いても学年が上がるにつれ言えない。好きだけど得意とは言えない。得意なんて言うてはいけないと感じているのではないだろうか。将来の夢というとなりたい職業が明確に出てこない。進路となるとどうしていいか分からない。

佐々木センター所長: 夢を持たないのはどこから来るのだろうか。

千葉委員 : 情報が良くも悪くもあふれている。その情報を自分で判断する力がない。シャットアウトしてしまうのか、悪いほうにとらえてしまうのか。

佐々木センター所長: 情報が多いと大変かもしれない。昔は情報がないから、想像してなれるのではないかと思えた。

齋藤(孝)委員: 生き生きと暮らしている人は夢にたどり着いた人だけではない。そのリアルを大きくなった子たちに、どういうありかたが自分にとって幸せなのかことを考えるほうが大切だと思う。親は苦勞させたくないから安定を求めるが実際生きていくのは彼らだしそこをどう想像させるかが大事。できないことを伝えるよりは自分の幸せの価値観を伝えたほうがいいと思う。新入社員に自己分析

させるようにしている。自己受容させて、ありのままの自分を実感させる。そのほうが早く成長する。会社に入って伸びる子は自分がある。優秀じゃない子の方が伸びることが多い。

佐々木センター所長：今の自分を知り、今の自分が満たされていると気づくことも必要と感じた。

齋藤（孝）委員：苦手なものはみんな持っている。リアルさを知ったほうがよい。

佐々木センター所長：地域と関わりがないので、人の良さや自分の良さが分かりにくいのだろうか。

千葉委員：触れ合う場がない状況。幅広い世代とかかわることがなく、一緒に過ごす機会がない。

佐々木センター所長：人との距離感はどうなのだろうか。昔は人の痛みや思いが分かったものだ。

齋藤（孝）委員：いじめをなくすよりは起きた時の解決法を協議するほうが価値が高いと何かでやっていた。なくならないのだから解決法を議論するほうがよいと。それを学校でやれるかは、わからないが、いろいろな考えの人がいると知るだけでも価値がある。

佐々木センター所長：学校でこういう取組をすれば分かり合えるのにとというのがあれば。

千葉委員：授業の中では自分がどう思われているかを伝えるのをやっているようだ。トラブルの時に帰りの会などで話し合っただけで子どもたちに考えさせるのはやっていた。何かあったときの対処の仕方やものの見方ができていくのかなと思う。

佐々木センター所長：社会に出ると挫折の連続である。

齋藤（孝）委員：部活で部長していた子などは苦勞が多いが引き出しが多い。やっているときは大変だったろうが、場数を踏んでいる子のほうがたくましい。

丸山主幹：経験値が多いということだろう。

齋藤（孝）委員：友達からの言われ方とかで傷つくが、こんなことで傷ついてもしようがないと思える。そこを抜けた子のほうが魅力的である。

丸山主幹：学びの連携の事業で「夢を持とう」と打ち出しているものが多いが、まずありのままの自分を受け入れるというのがあってのことと感じた。自分の良さも友達からの見方も受け入れて、自分だけが足りないわけではないということを知ることが自己肯定感につながる。

齋藤（孝）委員：自己受容が大切である。

千葉委員：数値で判断してしまうと、自分はできないのだとなる。

佐々木センター所長：これからを考えていったら、秀でている才能がある方がいい。勉強でもいいしPC大好きでもいい。

齋藤（孝）委員：なんでも好きなものがあると全然違う。そこから気付いて、世界に行くなら英語頑張ろうとかになる。日本で暮らすなら英語いらんよと言っている子は意欲を持たない。

佐々木センター所長：行事でも自信を持てる。勉強できないけどマラソンが得意とか。経験や体験も大切。

齋藤（孝）委員：勉強は得意じゃないけど、お楽しみ会で輝くクラスの人気者でもよい。

佐々木センター所長：子供たちは自分を出せているのだろうか。殻を破っていない感じがする。

協議 I の内容を全体共有

齋藤（亘）委員：プランの全体像・様々な施策をやり切れていないのではないかと。どの学校でもやることと、実情で取り入れるものがあるという話が出た。地域との関わり合いという話で、例えば小1サポーターの成果や課題はどこにあるのか、子どもたちがどうだったのかを見ていくべきだという意見があった。自分づくり教育では、たく生きの全体像はよいものである。今の子どもたちには非認知能力が求められているので、もっと取り入れるべきだという意見があった。これから個々の力を伸ばし、前を向いて進んでいける子どもたちを育てたい。先生方の声掛け・姿勢が求められ、大切である。求められている。

児玉委員長：施策の強弱・学校、保護者、地域もある。誰がやるという整理が必要だろう。教育委員会はコーディネーターとしてまとめていく。たく生き＝仙台市の確かな力はこういうことだろう。学力育成との調和をとり、ダブルスタンダードにならないようにしたい。

佐々木センター所長：全体的には夢と今の子どもたちをテーマに話した。今の自分をありのまま受け入れられるか、親との関わり合いの中で大事にしていきたい。危ないことを避けるのではなく、挫折したときにどうするか。理想と現実のギャップ、対応力、自己受容、チャレンジ精神、話し合う時間、あふれている情報が多い、夢につながっているか、夢を感じる時間はあるか、夢教室、有名な方もいいが、離れた存在になっていないか。そういったキーワードが出た。

児玉委員長：総論を各論にしていけるか。いまの子どもたちに身に付けさせたい力。やる気。失敗。挫折。挫折や失敗からどう立ち直るかに光を当てていっていいと思う。テレビを見れば東大王が出る。CMを見れば仙台のナンバーズスクールにこうとっている。学力調査をみても全国的に見劣りはしない。中位から下位をどうしてあげるかが課題である。高校の進学校に入ったとしても挫折はある。入ったあげく思った大学には入れない生徒がいる。どうしてあげればいいのか。すごい人の話だけでなく、普通の人ロールモデルを聞かせた方がいい。子どもたちはバーチャルな情報や、限られた情報に接している。これをどうしていけばいいかが課題だろう。

(2)【グループワーク】協議Ⅰを受けて

児玉委員長：議論を深めて、あわよくば御提言・御提案までいただければ。キーワードは「自信」「チャレンジ」「たくましさ」「やる気」。文部科学省のいう「生きる力」とつながる概念が、ますます必要ということが分かった。最近ではレジリエンス（回復力・復元力）が社会・人間に求められている。スマップがオンリーワンと歌うのがあった。全員が何かのオンリーワンになれるのは一つの理想である。個別最適な学び，一人一人の適性に応じた学び，一人一人が届いていける学びを学校や地域がどう提供できるのか。後半の議論ではAグループは自分づくり教育の充実という手がかりで深めて頂ければありがたい。Bグループは地域や家庭との関わりにおける教育のありようで深めていただきたい。

グループA 齋藤孝志委員 齋藤巨弘委員 佐々木大委員 丸山淳学びの連携推進主幹

齋藤（巨）委員：自分づくり教育ということだか，着地点はたくましく生きる力が最終目標。いろいろな人の生き方を聞く中で学ぶことが大切という話もあった。知らない大人，普通だったら関わり合わない方から話を聞く仕掛けも大事だと改めて知った。

齋藤（孝）委員：その子たちが25歳・30歳になったときにどういう風になってほしいということから考えていった方がいい。小・中学校の学校教育はスタートラインの手前。ここは右往左往，迷いや悩みがあったりしてその時にどうするかが大事だと思う。芸能人やスポーツ選手，弁護士などほんのひとつまみしかねれない人をロールモデルにするべきなのか。すごく高いものを目指すのではなく，平均の子たちがこうなっていたら社会が幸せになるよねってということだと思う。保護者も先生方もイメージを共有化できると話し方が変わってくる。今は，そこがばらばらだと思う。当然，ゴールはばらばらだけど，大きな層としてこうだよねってというのがあればよいと思う。

佐々木委員：大人になってからつながっている。小・中学生が分断されているように感じる。子どもの時にどんな経験をしたか，どういう刺激を受けたかが重要である。

齋藤（孝）委員：今ある点だけでYESかNOかになっている。大人はヒントを与えられるので，保護者に対してのメッセージも大切である。優秀な人を作るという意識ではなく自死を減らす，健康に生きる，メンタルが折れない人を育てる。

佐々木委員：たくましく生きるってことが大事。大人がたくましく生きていない。私たちがたくましく生きていますよ，というロールモデルになっていない。

齋藤（孝）委員：子どもに過度な期待をしすぎているのではないだろうか。

佐々木委員：自分ができなかったことを子どもにやらせてしまっている。

齋藤（亘）委員：夢を持ちましようとなった時に、抜きん出た能力を持った存在になるのが良いという感じがあるのだろうか。普通の人が多い中で、自分の力はそれほどではないと思ってしまう。

丸山主幹：夢教室で身近な近所の人から話をしてもらう方が現実に近いかもしれない。

齋藤（孝）委員：夢を叶えた人が幸せではない。夢をかなえた人は素晴らしい人。現実路線で幸せな人とはという生の声を聴かせた方がいい。むしろ近所の大人に話してもらった方がいい。ギャップが子どもたちを苦しめていると感じる。

児玉委員長：父親や母親に話してもらうのはどうだろう。この仕事の面白さは何かを話してもらっただけでもいい。ロールモデルを多様にするのが大切だろう。モデル校を設定してやってみるのもいいかもしれない。

齋藤（孝）委員：大企業の職業講話は、あまりリアルではない。中学生には生々しい現実的な話をした方がいいのではないか。そうならないと幸せじゃないという幸せモデルを外さないと。自分が自分らしく生きられれば幸せということが伝わるようにするべきである。

児玉委員長：高校生になるとそのツケが来ている。

齋藤（亘）委員：目指すべき目標を下げて広げるべき。世界は広いということを伝えたい。

齋藤（孝）委員：お金がないと幸せじゃないわけではない。世界には僕らからすると可哀想な環境に見えるところもある。でも、子どもたちはきらきらして生活している。一方で家族でスマホばかり見ている家庭を見た。ゴミの中できらきらしている子たちと、家族でスマホばかり見ている人とどちらが幸せか。今なんとなく親は大学に入って金銭的に苦労しない方がいいと言うが、本当にそうなのだろうか。

齋藤（亘）委員：最新型のスマホ持っているから幸せではない。それをどう使いこなせるか。

佐々木委員：幸せの価値判断は点数化できるものではないので難しい。お金いくらもついているとか、有名企業とか、ステータスとかは分かりやすいので、価値判断できる。社会はそれにすがってしまっている。お金を持っていることが、そんなに大事なことなのだろうかと言うべきだ。

齋藤（亘）委員：どうやって自分自身を切り拓けたか。自分だけで立ち行かないときに、抱え込まず、どう大人に力を借りたらいいか。そういうことができるような関わる力も必要である。

齋藤（孝）委員：ちょっとした凶々しさやずるがしこさは普段の生活では学べないが、そういうことが大切。ちょっとしたことで心を痛めることがあるが、そんなことどうでもいいじゃないかということもある。社会で、そういうつまずきは多いので、勉強ができることより、そこを何とかしてあげないといけないと思う。

佐々木委員：その方が長生きするし、幸せな生活になる。

丸山主幹：たくましく生きる力を育てるためには、何をすればいいのか。いろいろな人と会う、多様な体験や経験をする、自己受容のプログラムをする、何をすれば育つのだろうか。

佐々木委員：リアルな場が大切であると思う。職業講話もわかるけど、まずは行って見て、見る。そういう場が大切である。スマホでもオンラインでもできるけど、実際に体験することで、ざわめき、におい、そういったことすべてが大切。学校でも遠足とか体験あるが、すごい価値があり、記憶に残る。「旅行に行った」「運動会」「理科の実験でピーカーを落とした」などといった非日常感が大切である。

齋藤（亘）委員：そういったことがないと机上の話で終わってしまう。

齋藤（孝）委員：オリンピック選手が英語で話しているのを報道で見た。英語を勉強しろと言われてやっているのではなく、自分たちが海外に行くという意思を持った時点で英語を学んでいる。そのエネルギーがすごい。

佐々木委員：インタビューでも答えている。そういうエネルギーにつなげたい。エネルギーのある大人になるのが大切。そして、しくじり先生のように、大人がしくじったことを聞くべきである。

丸山主幹：親も失敗したことは言わないだろう。確かにしくじり先生が大切であろう。

児玉委員長：ロールモデルの多様化・身近さが大切ということである。今までの自分づくり教育では、「まだ足りないから、もっと頑張る。」だった。ごく少数の、成功者の体験では無理である。学校の中の小手先をいじくっているだけではだめで、親と地域をどう巻き込むかが大切になる。

齋藤（孝）委員：保護者とのイメージを共有することから始めないといけないだろう。

児玉委員長：PTA 会長に集まってもらって話すか。

丸山主幹：たくましく生きるために必要な力とは何だろうか。

佐々木委員：「リカバリー力」、スムーズにいく人生はない。あとは、受容性・寛大性・寛容ではないか。

齋藤（孝）委員：大人の共有。特別な人をつくるというよりは、皆さんの周りにこういう大人がいれば魅力的では。ちょっとしたことがあっても次の日ににこにこ出勤できる。議論ができる。雑談できる。そういう身近な人が少なくなっている。

佐々木委員：オールウェイズ笑顔は大事である。

齋藤（孝）委員：すぐ傷ついたり、自分と意見が違くと距離を置いたりする子がいる。特別なことではなく、日常生活で大切だよねというところからやっていく。親とは、こういう人になってほしいという思いがある。25歳、30歳でこういう大人になってほしいという目線を持っていることが大切ではないか。

佐々木委員：文化祭等で大人に出展させるのはどうか。真剣に大人が競う。大人のカッコよさ。大人が「楽しい」とならないといけない。キャンプに行くとか、火をおこせるとか。学校の教室ではなく、火を囲みながら話すこととかもいいと思う。

齋藤（孝）委員：「学校に泊まろう」とかね。

佐々木委員：校庭でキャンプしたり、共同作業したりする中で話す。親も巻き込んでいかないと変わらないだろう。身近な大人たちの出番を増やすことが必要だと思う。

齋藤（孝）委員：確かに、親を巻き込んでいかないと変わらない。楽しみながら遊ぶ、つくる。身近な大人の出番を増やしてあげるのは必要かもしれない。

齋藤（亘）委員：大人をやる気にさせるのは難しい。必要感とお得感とかが必要かもしれない。それをどうするかだろう。

齋藤（孝）委員：挨拶は癖、挨拶はするものだと決めないと合理的に説明できない。気分がいいとか悪いとか関係ない。延々続けることで、自然と出るようになる。何のためにやるかという理由はいらぬ。そういう要素がある。合理的に説明できないことはやらなくてもよいということではない。大切なことがそぎ落とされていっていると感じる。

佐々木委員：そんな中でも楽しい方がいい。

齋藤（孝）委員：昔、高校の野球部の監督が練習に来る感じで機嫌が悪いかどうか分かった。

齋藤（亘）委員：危険回避能力が必要ですね。

齋藤（孝）委員：たくましく生きる力。今の子どもたちを育てるのもそうだけど、25歳、30歳になったときにどういう大人に育てるかが大切。小学校ならプロ野球選手などの理想的な姿もいいが、中学高校では身近な人の話を聞くことが必要。幸せの感覚は多様なものである。多様な経験が必要で、大人との関わりの中で話を聞いて学ぶ。挨拶のように理屈で考えるのではなく、繰り返しやっていくことで後から良さがついてくることもある。

グループB 鹿野恵美子委員 佐藤真奈委員 千葉恵美委員

佐々木賢哉教育センター所長 蓮沼秀行学びの連携推進室長

佐々木センター所長：たくましく生きる力の中で、「チャレンジ」「自己受容」などのキーワードが出た。そのキーワードに向け、子どもたちにどう力をつけていくか、学校・家庭・地域、どの立場からでも自由にお話しいただきたい。

鹿野委員：現在、コミュニティ・スクール（以下、CS）は、地域が関わる方向で進めているが、私は待っていましたという気持ち、先生方が大変なのはわかる。保護者も地域もわかっている。そういうところに知っている人や長年かかわっている人が入ることで、こどもが親にも言えないことをその人になら言えるかもしれない。そういう場を大切にしたい。CSにかかわらずいろんな人とかかわれる場が

あるといい。個別最適な学びをどうしようかというところで、一日中、本を読んでいた子をとにかく教室に戻りなさいと進めるだけでいいのかとか、この子にとって何が大切かとか考えると何も言えなくなる。この子にとっての「学び」って何なのか。一人にするわけにはいかないのは分かるが、支援員もつけられない。個別でその子にとって一番いいところで学べたらと最近思う。学年が上がっても様子が同じだと何かあるのかな。おうちの人はどこまで知っているのか。大切なことをきちんと見極めてあげられるとよい。まずは話を聞いてあげる。先生でもいいが、忙しくて大変であるなら第三者の大人がひたすら聞いてあげたら戻れるかもいつも思う。

佐々木センター所長：担任は6年間、同じ先生ではない。地域に分かってくれる人がいるのは大きい。

鹿野委員：地域の人もある子どうしてるかと気になっている。成人してからも挨拶してくれる人だっている。小さい頃から、友達と思える人がずっと見守っていけるのは大事である。

佐藤委員：このホワイトボードを見て思ったが、困難にぶつかったときに立ち直る力が弱いのではないかと不安になる。昔からなのか、そうってしまったのか、だとしたら、それはなぜなのか。前を向いて歩いていける子になって欲しいと親として望んでいるが、前を向いたときに乗り越える力が少ないと思うので課題にしたい。今の大人との違いって何なのだろうか。外で遊ぶ子も少ない。興味を持つのは機械の中のこと。以前は怒られて困難を必死に乗り越えて、いろいろなことを学んできたと思うが、今の子どもたちはギャップを乗り越える力が少ないと感じる。すごく心配である。

蓮沼室長：地域とのつながりや子供の様子の変化を考えると体験の機会の不足があると思う。そこで人間関係やいろいろなことを学ぶ。しかし、求められるものの許容の範囲が狭くなっている。いい加減な大人が少ない。大丈夫だって…というモデルがない。子供たちは現実を見せつけられて、こうしないとダメと求められる。ケガしたってけんかしたって大丈夫という寛容さがない。失敗したときに励まされるとか、お前も失敗したのかというのがない。チャレンジしたいが見通しがつけられず、どうしていいか分からない。

佐藤委員：遅刻してしまう子に対する教育も違ってきている。昔は遅刻したら怒られたが、今はそうでもない。9時くらいに焦るでもなく、平気で歩いている子を見かける。社会に出た時どうなるんだろうと感じている。失敗したから次は遅れないようにしなきゃという気持ちが大切だと思う。小・中学校で失敗するのは大したことじゃないのに、怒られることがない。大人になって失敗した時にリカバリーできない。先生方はあまり怒らないので、子どもたちにとって怒られる経験が以前より極端に少ない気がする。

- 児玉委員長：子供たちに「私の失敗」を話させると面白い。「いいよ」と言われることに加えて、あの子でも失敗しているというのを共有できる。ロングホームルームか道徳か特活なのか。普通の人々のロールモデルだけでなく、互いに今だから言える面白い話をし合うといったのがあったらいいと思う。
- 佐藤委員：先生の失敗を言ってもらえるのもいい。あまり自分の失敗を話してもらうことに慣れていない。先生の話聞いて、子ども達も話してくれるようになるのではないかな。
- 児玉委員長：今だから笑える話から始めてもらって。
- 佐々木センター所長：前向きな失敗をしてほしい。頑張ってみたけどダメだったというような。遅刻など消極的に失敗していることを言っても意味がない。
- 佐藤委員：遅刻しそうで焦っている子を見ると安心する。もっと遅くに余裕で歩いている子もいるが・・・。
- 鹿野委員：遅刻しても来てくれてよかったって子もいる。
- 佐藤委員：それで救われている子もいる。昔は立たされたこともあった。今は疑問視されるがそれで得たものもあり、自分を強くしてきた部分もあった。挫折を自分で乗り越えていける力に関しての話だが。
- 鹿野委員：先生の話聞いたとしても、僕の家々のルールはこれだからと自分が納得できないことはしないという子もすでにいる。家庭の方針もあるだろうが、共有していい。負けたくないから蹴落とす。そうじゃない、どれでもよい、みんなよい、間違えてもよい。黒板見てから書けば1回で済むという子もたくさんいる。
- 児玉委員長：教育委員会や学校が保護者をどう巻き込むかの話で価値観の問題。多様な価値観でコミュニティはできているので、学校としてはこういう価値観でやっているの共有していただきたいというのをどう保護者に分かってもらうかは重要である。
- 蓮沼室長：それがCSのポイントの一つ。担任の先生が発信することが浸透しないこともある。
- 児玉委員長：義務教育は誰の義務かと問うと、教員になろうとする学生でさえ国の義務だと思っていて、かなり間違っている。実際は、親の義務だが、一般の人はどこまでわかっているか。保護者に向けての施策って何をしているのか。参観日などどうやっているのか。
- 鹿野委員：来て欲しい人ってこないものである。
- 児玉委員長：価値観をどう伝えていくか。何か仕掛けがある。CSをどう充実させるか。
- 蓮沼委員：学校が時間を割いているのは保護者対応。時間とエネルギーを割かれている。あんまり親がいろいろ言うとな先生のほうに参ってしまう。特に若い先生は、怒られたことのない人が先生になっている。PTA活動もどう整えたらよいか。意義も含めて、今までのものと違う考えになってきている。家庭環境が多様化している中

で、地域がそこを補完している。今はやってもらうが、それを恩返ししようという思いを持てるような仕掛けを作ることができれば効果的である。

佐藤委員：地域や地区活動にかかわっている人は少ない。地域でも頑張っていて、トップをお父さんお母さん世代にと思っていても、現実としてトップから変わりたくない人もいるし、甘えさせてもらっている。自分たちが出来るかというとまだ難しい。トップに立たなくても私たち世代も地域に協力できるようになれば違うのかと思う。コミュニティ・スクールがそういう形なのかと思っている。PTAも地区の方が手助けしてくれて、地域の方と一緒にとなれば今までPTAでやらなければいけなかったことも地域の人と一緒にすればやれる。逆に地域の活動にもPTAが関わる形をとらないといけない。その意識付けが難しい。

児玉委員長：かつては地域に開かれた学校をうたい、いろいろやった。一気に開くのは難しい。まずは保護者からというのが現実的だろう。

蓮沼室長：過去の事件で地域に学校を開くことが安全なのか議論があった。放課後、校庭は自由開放が原則だったが、校庭では遊べなくなった。

佐々木センター所長：来て欲しい人ほどこない。そういう人と本当はつながりたいのだが。

児玉委員長：自分の子が問題あるのは分かっているので、行くのが恥ずかしい。学校に任せたいし、見ないでいたい。来てくださいと言われると、とうとう来たかと思うのではないか。

鹿野委員：活動にかかわっている方のお子さんは普通にやっている。町内の活動でもおうちの人が顔を出している子はたくましい。

児玉委員長：絶対悪の子供はいない。

鹿野委員：放課後教室のような子ども食堂のようなものがあればと思うがハードルが高い。開きたいが、場所も人手もお金も…。やりたい人は周りにも何人かいるがどうしているか。そういう人はいると思う。

児玉委員長：お年寄りもやりたい人はたくさんいると思う。うまくいっているところもある。一方で自分流の価値観でやってしまうと保護者と混乱して教師の仕事が増える。子供たちの支えてもらいたいというニーズと地域のニーズが合う場所があってもいい。

蓮沼室長：生涯学習課では放課後子ども教室などのプランは考えているが施設に余裕がないと設定できない。

児玉委員長：この手の弱者を守る話の難しさがある。臨床心理士になれる学部を作ったら保健管理等がパンパンになった。心理学を学びたい人は自分も何かある。子供を守るところを作れば作るほどそれが呼び水になってしまう。強く育ててほしいのに、どんどん依存する。自立を妨げる負の側面もある。バランスをとりながらやっていくしかない。どのくらい切迫したニーズがあるのか。

- 蓮沼室長 : 民生委員・児童委員が情報共有してつながりながら関わりを持っているが、家の中にどれだけ関わっていくのか難しさがある。それをやっていると学校はどこまで関わるかとなっていく。
- 児玉委員長 : 家庭や地域の環境をどうするかは自己矛盾。やればやるほど首を絞める。どこかでラインを引かないといけない。
- 蓮沼室長 : 家庭に差があるところをフォローする仕組みが必要。家庭環境への個別対応となると、福祉や経済と連携した支援が必要となる。
- 児玉委員長 : CS でこの機能を足すとか可能そうなのはあるか。
- 蓮沼室長 : CS がこれまでと違うのは、ポイントになって動く人の数が増えることで、地域に浸透させていくための運営の仕方を考えていく。つながりを広げられるような取り組みを共有していく。
- 児玉委員長 : 人材育成の問題。やりたいと思っている潜在的な人がいることが分れば課題にできるかもしれない。
- 蓮沼室長 : やってみようという環境づくりとつながりづくりが大切である。
- 児玉委員長 : コミュニティの再生が課題。人が少なくなってちぎれた関係をもう一度つなげる。それは全国的な問題だろう。
- 千葉委員 : 地域性もあるかもしれないが保護者の参加率が低い。声掛けをしてもなかなか参加者が伸びない。集まるのは地域の決まった方。町内会も後継者がいない。子供会の加入率は100%だったのが、今は半分以下のところも。子供会もPTAも町内会も入りませんという人もいる。あげくに子供会を解散したところもある。多様性、寛容性というところで難しい。今まで先輩方にやってきてもらったこともあるのでやってきたがつなげていく相手がない。研修会を開こうとして声をかけても集まらない。つながりを自ら断ち切る方もいる。難しいなと思う。今までここにくるまで自分も助かったこともあるので。小1生活・学習サポーターをしているとどこまでやるべきか悩むことがある。これが、先生がやることだろうか？家庭でやることではないかと思うこともある。難しい。
- 蓮沼室長 : PTA活動に参加する事で学べることもある。学校での活動がキーワードになる。家庭が子供に関心があればまだ何とかなる。
- 鹿野委員 : 給食も前を向いて食べるようになって、残しても平気な子が増えた。スプーンでも恥ずかしくない。グループだと食べてみようとなるができない。先生もなかなか言えない。

協議Ⅱの内容を全体共有

齋藤（亘）委員：たくましく生きる力をキーワードに話した。25歳や30歳，将来的にどう
いう姿になってほしいかを目指して今の学びを進めることが必要。夢教室も小学
校段階であれば野球選手などのスターや理想的な方の話を聞くのもありだが中
高では身近な人の話を聞くのも大事。しくじり先生のような失敗談から学ぶ状況
も必要では。幸せだと思える感覚は人それぞれであって，多様なものである。子ど
もたちには，多様な経験や体験が必要ではないか。バーチャルだけでなくリアル
の現場で経験することに学びがあるだろう。地域の大人との関わりということで，
文化祭や運動会，キャンプなど身近な大人と関わりを持つ機会を作れば話を聴け
るのではないか。理屈でいうのではなく，まず挨拶をしていくことで良さとかが出
てくることもある。

佐々木センター所長：乗り越える力を身につけるためには日常的な地域との関わりが増えると
よい。自己肯定感が上がるのではないか。失敗談を語れる雰囲気，前向きな失敗
をさせて乗り越えてやってみるという流れにもっていく。PTAの方同士や地域と
の方々をどうつなぐか。コミュニティ・スクールも突破口になるものでありたい
という話もあった。どうつなぐかつながるかもキーワードになってく。

児玉委員長：事前に配られていた2018のものにはDには体験プラザや夢教室…がはいっている。
これまでやっていたことを継続する一方で，精査してもう一度整理して必要
によって追加していただくといい。Eもそう。いろいろ入っているが，これを今
日の議論にすっかり変えるのではなく，今日の議論を加えるなどして整理してい
ただけるとよい。今日話題にしなかったが学校教育の授業づくりに関するもの
がある。今日取り上げなかった部分はより充実していくことでよいと思う。

たくましく生きる力の要素として「失敗に学ぶ」を入れるもこともありかなと
思う。今日は話題にならなかったかもしれないが「頑張らなくていい」「自己肯定
感」という議論が多かったが，頑張って克服するのも大事なこと。持久走などが
がんばって2キロ走れたよとか山から歩いたとかやんちゃな行事も昔あった。克服
して成長する経験がないかもしれない。乗り越えて克服することで自分たちは大
人になれたという経験も大切。我慢して乗り越える力も時には必要で，要素とし
て入れることも検討してほしい。充実した議論になった。

4 連 絡

5 閉 会

この議事録について，会議の内容と相違ないことを認める。

令和 4年 9月 8日

第3期「確かな学力育成プラン」検討委員会

署名委員 鹿野 恵美子